

芸術家のオートエスノグラフィー —アートプロジェクト共同体形成における葛藤と協調—

中島法晃

岐阜女子大学 文化創造学部

(2021年11月9日受理)

Autoethnography of Artists — Conflict and Cooperation in Art Project Community Formation —

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

NAKASHIMA Houkou

(Received November 9, 2021)

要 旨

本稿では、芸術家が外国人集住地域である保見団地においてアートプロジェクトを企画、運営することで生じた、地域住民や行政との摩擦と、芸術家としての葛藤についてオートエスノグラフィーによって研究した。プロジェクトにおいて、壁画制作にかけた期間は2週間であった。それ以外の約9ヶ月間は会議と、住民との交流、資金調達のためのクラウドファンディングの広報活動であった。プロジェクトをとおした様々な人々や事象との摩擦や、壁画制作に取り組むうえでの資金面等における芸術家としての葛藤、そしてクラウドファンディングによって得た、葛藤を越えた「使命感」から、芸術家は多様性と向き合う「対話力」を身につける基盤ができたといえる。また、アートを介した交流が多文化をつなぐ可能性についての示唆を得ることができた。それは芸術家が主体となってアートプロジェクトを企画、運営したことにおける一つの成果だ。刻々と変化していく社会的情勢や社会的事象の中で、現代を生きる芸術家に求められるものは、社会的情勢や社会的事象との主体的な対話であり、多様性に立ち向かうことができる流動的な対応力ではないだろうか。

キーワード：芸術家、アートプロジェクト、オートエスノグラフィー、保見団地、アートワークショップ

1. はじめに

1-1. 研究の目的

1990年以降、日本各地で様々な形態でア

ートプロジェクト¹⁾が開催されている。アートが社会の中に入り込み、その土地に起こる社会的事象や住民との関わりの中で形作られているものであり、芸術家はその土地に滞在し

て住民らとの協働によってアート作品を制作したり、住民とのアートワークショップ（以下、WSと記す）や議論を重ねたりしながら地域全体でプロジェクトを形成している。過疎地域の町おこしイベントとして経済発展を促進しているという効果や、地域が注目されることによって住民らにとって、住んでいる地域への愛着形成や誇りを高める効果、地域の学校への教育的な側面にもたらす影響等、アートプロジェクトが地域へもたらす効果や影響は多様である。

本稿では、日本有数の外国人集住地域である保見団地における「保見アートプロジェクト」とおして、芸術家がどのようにプロジェクトを企画・運営したかについてオートエスノグラフィーによって記述する。アートプロジェクトに参画する芸術家が、プロジェクトについて分析的に論述した研究は管見の限りなく、多文化コミュニティの中に外部から日本人芸術家が介入することで生じた摩擦や、プロジェクト運営における芸術家の意識と他者の意識との差異による葛藤について、保見団地でのフィールドワークとおして経験したことを記述することで、現代を生きる芸術家に求められる一つの芸術家像を浮かび上がらせることを目的とする。

1-2. 研究の方法と依拠する資料

本稿は研究方法として、「前衛的な質的調査」[Wall 2016, p.1] 方法であるオートエスノグラフィーを用いる。「オートエスノグラフィー」という用語は、Adamsら(2017)

- 1) 美術家たちが廃校などで行う展覧会や拠点づくり、野外での作品展示や公演を行う芸術祭や、社会包摂などコミュニティの課題に取り組むための活動など、幅広く多様な場面でアートプロジェクトという言葉が使われる。熊倉純子、長津結一郎、アートプロジェクト研究会編(2015)『『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990年→2012年』補遺』アーツカウンシル東京

によると、Heider(1975)の、文化的な組織の形成者である自らが自文化を説明するという実践研究において使用された際に登場したという。Wall(2016)によると、オートエスノグラフィーは1979年にDavid Hayanoが作り出した用語であり、「自分と人々の間で伝統的なエスノグラフィーを説明すること」[Wall 2016, p.2]を目的としていた。Hayanoは、民族誌学の手順をとおして自分の人生を分析する研究であることを認めつつも、理論的、分析的、学術的ではなく、物語的、感情的、治療的、そして自己中心的であると反証してきた。しかしながら、「筆者／研究者の個人的な経験のレンズをとおして社会現象を研究するためにますます利用される興味深い方法」[Wall 2016, p.1]として、1990年代にCarolyn EllisとArthur Bochnerによって研究方法が示された。「自己の文化の中の自分自身の経験を対象化して、自己について再帰的に振り返り」[Ellis, Bochner 2006, p.137]、個人の生きられた経験を理解するために、「体系的な社会的内省と感情的想起と呼ぶものを使いながら」[Ellis, Bochner 2006, p.134]自己を記述し、「個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示」[Ellis, Bochner 2006, p.134]するものであると定義している。

そして、研究において重要であることは、「研究主体の個人的経験がどのように文化を照らし出しているかということ」[Ellis, Bochner 2006, p.137]と述べている。また、Ngunjiri(2010)は、自己を取り巻く文脈が自己の構成にどのように影響を与え、形作ったか、そして自己が文脈の固有の力にどのように反応し、応答し、抵抗したかを探求することが、オートエスノグラフィーという研究方法の基礎であると述べている。

拙稿(2016)、(2020)に、現代を生きる芸

術家としての生きづらさや葛藤を抱えながらも、副業をとおして制作概念を抽出していくこと(中島2016)や、地域に根ざした活動を展開する芸術家が、周囲の人々から芸術家として認知されるために行った様々な方法(中島2020)について記述した研究がある。いずれもオートエスノグラフィーの方法で分析している。オートエスノグラフィーは自己内省を繰り返し客観的な視点に立ち分析を行う。芸術家としての芸術活動と同時進行的にオートエスノグラフィーを行うことは困難であり、いずれの研究も過去の経験に基づいていることで再帰的な記述を可能としたといえる。本稿にあたり、アートプロジェクトの実施中に同時進行的にオートエスノグラフィー研究を行うことを試みたが、芸術家としての活動を行っている期間中に記述していくことは困難であった。執筆がアートプロジェクトの1年後の現在となったのは、様々な資料を収集する必要性があったこと他に、筆者の芸術家としてのプロジェクトでの活動について感情的で感傷的な思いが強く、客観的もしくは俯瞰的な視点に立つことがこれまでできていなかったことが理由として挙げられる。学術的な視座に立ちオートエスノグラフィー研究を行うことの難しさについて、本稿を執筆する現在まで認識している。

本稿では、2020年3月末に終了した保見アートプロジェクトの芸術家チームのリーダーとなった筆者が、芸術家として保見団地が抱える問題とどのように向き合いながら活動をしたかについて記述する。

本稿で扱う資料は、保見アートプロジェクトの会議議事録および参画者とのEメール、ソーシャルネット・ワーキング・サービス(以下、SNSと記す)である「LINE²⁾」および「Facebook³⁾」において筆者および共同体である他の芸術家が投稿した記事、プロジェク

ト終了後に自主制作したフォトブック内に芸術家や他の共同体メンバーが寄稿した記事である。2019年6月23日から2020年4月4日までのデータを対象にする。なお、プロジェクトの参画者の語りやEメールやSNSでの会話等について、分析対象となる可能性があるものについて、当該人物にはプロジェクト中に口頭にて研究について説明し、承諾を得た。人物は全て仮名にし、ローマ字表記とする。

次節に詳述するが、保見アートプロジェクトは10名の芸術家と保見団地自治区、NPO法人、愛知県住宅公社等の多様な参画者との協働によるものであり、会議だけでなくEメールや、SNSでメッセージのやりとりを繰り返しながら企画運営するものであった。小川(2019)は、情報通信技術(ICT)を利用した新しいエスノグラフィーの方法について、「インターネット時代に生じた変化とは、他者との文化的経験を内包する『自己の物語』を被調査者自身がSNSにおいて語り始めたこと」[小川2019, p.175]であるとし、被調査者によるSNSでの情報発信と物語生成の方法を検討する必要性について述べている。また、「被調査者による人類学者を含めた多様な他者との交流や交感の記録を『オートエスノグラフィーを構成しうる断片』と見することは可能」[小川2019, p.175]であるとの指摘から、インターネット時代のSNSを活用したエスノグラフィーの可能性についての議論の発展に寄与したい。

資料に基づき記述していく過程で、現在の「筆者」が、芸術家である「中島」を対象化

- 2) スマートフォン用の無料通話アプリであり、個別に無料で電話やメッセージのやりとりができるほか、グループを作成すればその中で全員とメッセージのやりとりが可能である。
- 3) 世界中で使用されているSNSであり、実名で利用し、インターネット上で文章や画像、動画等を投稿することができ、社会的な交流をすることができるサービスである。

し振り返る記述が存在する。オートエスノグラフィとは「自分の感情を振り返り、呼び起こす、内省的な行為」[井本2013, p.104]であり、過去を対象化し、現在の「筆者」が分析していくことを方法としている。そこで、芸術家としての活動や思考を記述する際は「中島」と称し、それを対象化し記述する「私」を「筆者」と称する。「中島」および「筆者」と、自己についての記述を分ける方法は、過去の「私」という存在が「共に『筆者』によって記述され、分析される対象」[福島2011, p.33]であり、筆者に対して過去の「私」は「相対的に区別される関係となる」[福島2011, p.33]という福島の方法を参考にする。

2. 保見アートプロジェクト

保見団地⁴⁾という多文化地域が抱える問題の中で、アートを介した芸術家と外国籍の住民との交流をとおして、住みやすい団地づくりを目指したいという願いからスタートしたのが保見アートプロジェクトである。保見団地に活動拠点を置く特定非営利活動法人トルシーダ（以下、トルシーダと記す）の代表T氏の呼びかけに応じた芸術家が、自治区や愛知県住宅供給公社、県営住宅連絡協議会等との協働により、県営保見団地25棟1階にある住民の共同スペース、通称「憩いの場」の壁を壁画作品に変え、交流の場としての機能を

復活させることを目的として立ち上がった。

トルシーダは1998年から日系ブラジル人、ペルー人等の南米出身の子どもたちの居場所づくりや日本語学習支援を始め、文部科学省と国際移住機関の委託を受け「定住外国人の子どもの就学支援事業⁵⁾」の実施を開始した。2019年度は、外国人の子どもの社会適応サポート事業（豊田市）や日本語初期指導教室（みよし市、安城市）等の事業をとおし、外国につながる子どもや若者の日本語支援、自立支援を行うとともに、外国人も活躍できる地域づくりを目指して活動している。

2019年6月にトルシーダ代表のT氏からの依頼を受けた筆者は、SNSを活用して呼びかけた愛知、岐阜、三重在住の、中島を含む芸術家10名と、2019年6月から2020年3月までの約10ヶ月間全20回以上、自治区や県の住宅公社職員、豊田市職員らとプロジェクト企画運営についての会議を重ねた。結果として、「芸術家が壁画制作を行う」ことに加え、「団地の住民が壁に絵を描く」こと、つまり「芸術家と住民との協働により壁画制作を行う」ことになった。住民と協働するにあたり、外部芸術家と住民が交流する必要があった。参画した芸術家は、美術家である中島をプロジェクトリーダーとして、画家5名、イラストレーター、ペインター、彫刻家、写真家それぞれ各1名の全10名である。

団地住民と交流し、「憩いの場」の落書きをアートで生まれ変わらせることを周知するために、2019年11月3日から2020年3月29日までの期間中、10名の芸術家がそれぞれ

4) 愛知県豊田市の北西部の保見ヶ丘に位置する保見団地は、1969年に当時の住宅公団と愛知県によって共同開発され、1975年から入居が始まった。2020年、保見ヶ丘の人口7,036名のうち、日本人は3,106名、ブラジル人は3,453名、その他にもペルー、ベトナム、中国など様々な国にルーツを持つ人々が暮らしている。団地内の共同スペースへの落書きやゴミの不法投棄、ゴミへの放火などが続く現状がある。愛知県経営戦略部国際まちづくり推進課「豊田市外国人データ集」https://www.city.toyota.aichi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/767/22.pdf（最終閲覧日2021/3/21）

5) 文部科学省では、不就学・自宅待機となっているブラジル人等の子どもの就学を支援することを目的に、「定住外国人の子どもの就学支援事業」を国際移住機関にて実施している。文部科学省「定住外国人の子どもの就学支援事業」https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/1331271.htm（最終閲覧日2021/3/21）

WSを計画し、計10回実施した。WSでは、芸術家と住民、また住民同士がアートを紹介して交流を図りながら、一緒に壁画制作を行うというプロジェクトの趣旨を伝えた。外国人も日本人も参加協力し、団地を住みやすいきれいな環境にしていくことを共通目標として、「言葉のいらない」アート表現をとおして芸術家と外国人住民、また、外国人住民と日本人住民の相互理解を促進していった。最後のWSであった3月1日は『今日は特別！みんなで落描きをしよう！落描きワークショップ』と題したWSを行い、落書きで汚された県営保見団地25棟「憩いの場」の壁に、これまでのWSに参加した子どもから大人、外国人住民も日本人住民も共に楽しみながら壁に絵を描いた。翌日より一部の壁を除いて白く塗り直す修繕工事が業者によって行われ、2020年3月14日から芸術家による壁画制作が始まった。壁画制作期間中、WS参加者である住民らが芸術家の助手として描画の手伝いをする場面があり、制作期間2週間後の2020年3月29日に「憩いの場」は新たな壁画作品「SALA DE ARTE 地球家族」として完成し、保見アートプロジェクトは終了した。全10回のWSの参加者はのべ1,000名を超えた。

3. 保見アートプロジェクトと芸術家

3-1. プロジェクトの立ち上げと芸術家の葛藤

筆者の知人の大学教授を介しトルシーダの代表T氏から連絡があったのは2019年6月17日であった。依頼内容は、将来的に子どもが住みやすい団地にするために、子どもを主体的に団地の活動に関わらせることを目的として、「団地の（外国籍の）子ども達に、壁に絵を描かせる指導をしてほしい。」というものであった。その後の6月21日に中島は

保見団地へ視察に向かった。「すれ違う人は外国人ばかりで日本語は聞こえてこない。初めて来た時は異国のよう」（フォトブック p.1 中島の言葉）に感じた中島は、25棟の「憩いの場」に足を踏み入れた時の思いを、「昼なのに薄暗く、とても子ども達が憩う雰囲気ではなかった。」（フォトブック p.1 中島の言葉）と記している。中島はこの時、落書きで埋め尽くされた壁を見て、「子ども達が壁に絵を描くことを指導する」だけでは子どもが住みやすい団地になるかどうかを想像することができなかった。視察後にインターネットや文献等で保見団地のことを調べ、壁画制作を行う以前に、住民と交流する必要性を感じた中島は、一人での活動は困難であると考え、漠然とした想いのままであったが、視察後の6月22日に、SNSでメンバーを募集することにした。SNSに投稿した中島の記事は以下である。

[保見壁画プロジェクト] メンバーを募集します。豊田市保見ヶ丘には、人口7,300人のうち約4,000人、約55%の外国人が住んでいる。その中にある保見団地には67棟のマンションが並び、7割近くの外国人が暮らしている。(中略)今回、保見団地の建物の共有スペースの壁をアートで生まれ変わらせてほしいとの依頼があり、現場を視察し、引き受けることになった。(中略)そこで、僕と一緒に保見壁画プロジェクトに関わってくれる方を募集したいと考えています。図案イメージの決定のための打ち合わせや現場での壁画ペイント、住民とのイベント企画など、たくさんの人との関わりの中で生み出していきたいです。(2019/6/22 Facebook 中島投稿記事)

この時中島は、「子ども達に壁に絵を描かせる」ことについては触れず、「住民とのイベント企画など、たくさんの人との関わり」という文面に置き換えている。中島は美術家として制作活動をする傍らで、約15年間美術教育に携わり、多様な子どもとアートをとおして関わってきた。「憩いの場」を視察し、率直に感じたことが2つあったことを記憶している。子どもの絵だけで壁の面積を埋め尽くすには相当な時間がかかる不安があるということと、子どもに絵を描かせるだけでなく、中島自身が芸術家としてこの場所に作品を残したい、という思いが湧いたことである。しかし、「憩いの場」の広さは約90平米、床面にはコンクリートの半円形のベンチが2つあり、壁の総面積は高さ2.4m×幅38mという大きな空間であり、子どもが絵を描くことを視野に入れたとしても1人で制作することは当時の中島にとってスケジュール等の調整に困難が生じる可能性を考え、T氏の意図とズレがあることを認識しながらも、中島は上述のようにメンバーを募集したのである。

SNSへの投稿後、9名の芸術家から参画希望の趣旨の連絡が届き、6月28日までの期間に中島は個別に芸術家を保見団地視察に連れて行った。「憩いの場」に対して芸術家が率直に感じる思いについて現地で意見交流をし、トルシーダの代表T氏の意図である、「子どもに壁に絵を描かせる」ことについては現地で伝えた。視察後は芸術家メンバーで作成したグループLINEでメッセージのやりとりをとおして意見交流を重ね、各自の画風に即した壁画プランをイメージしつつあった。

芸術家は作品制作に取り組む際に、現地を見て感じたことや発想したことを起点にしてコンセプトを抽出したり、何度も現地に訪れてフィールドワークをしたり様々なメディアからの情報に基づいてアイデアを構築したり

等、多様な方法で制作に取り組む。グループLINEでのやり取りの中で、芸術家メンバーはそれぞれ保見団地の現状を鑑み、自己の作品で団地を明るく住みやすい場所にしたいという思いをもち、そのために、実際に住民と交流してどのような人々が住んでいて、どのような生活をしているかを肌で感じたいという思いをもつようになっていた。中島も同様に、T氏からの依頼である、「子ども達に壁に絵を描かせる」ために、子どもと関わるだけでなく、青年や親世代、お年寄りも含めた外国籍の団地住民と交流をもちたいという思いがあった。芸術家メンバーの思いをT氏に伝え、壁画制作のコンセプトを考えるために住民と会う機会を設けるよう懇願していた。

芸術家メンバーが壁画制作コンセプトを生成していた頃、T氏は自治区役員や団地の管理者である愛知県営住宅管理者事務所（以下、県営事務所と記す）所長との打ち合わせを行っていた。T氏を介して芸術家メンバーの考えを伝えてもらうと、自治区役員および所長から、壁に絵を描くことに対して、「子どもが絵を描く？絵を描いてもまた上から落書きをされるだけじゃないか。」との返答があったという。また、「予算はどれぐらいを考えているのか、剥がれた天井を直す時に落書きを白塗りすることはできる。」という言葉をはじめ、「作業中は誰も入れないように厳重に囲う。」ことや、「出入り自由な空間ではいたずらされる。新たな落書き防止のために、関係者以外は入れないように。」(2019/7/6 T氏から中島へのEメール)という指示が届いた。

保見団地で20年以上外国籍の子ども達に日本語や学習支援の活動を行っているT氏にとって、団地への愛着形成を育むことが日本での生きやすさに繋がることを信じている

からこそ、「憩いの場」という共同スペースを生まれ変わらせたいという願いを抱えて、芸術家である中島へ依頼をしたのである。一方で、自治区や県営事務所側は、長年ゴミの不法投棄や落書きに悩まされ続けている経験から、「壁に絵を描く」こと自体を良く思っていない事実があることを、この時に中島は初めて知った。つまり、このプロジェクトの実行は確約されたものではなく、実現しないこともあり得るということであった。「予算はどれぐらい考えているのか」という言葉からも、活動を実行するうえで必要不可欠である資金面においても未定事項であることを示している。

そこで中島は、T氏との壁画制作のスケジュールや作業方法についてのEメールでのやり取りの中で、「作業に関して、作家は住民と交流しながら制作に臨むつもりです。基本的には制作中はオープンにして、時には一緒に塗る場合もあるかもしれませんが。計画としてはまず芸術家が壁画を完成させ、その絵の中に住民に手を加えてもらうようなイメージで考えています。芸術家がない制作時間外は嚴重に囲うという方法で進めたいです。」(2019/7/9中島からT氏へのEメール)と伝えた。芸術家メンバーはすでに各々で壁画制作プランやアイデアスケッチを進めつつある中で、中島は実現可能な道を模索していた。

3-2. 団地住民と芸術家

自治区や県営事務所には、団地を現状維持していきたい考えがあり、アートによって団地を変えたいというT氏の思いや芸術家メンバーの考えには差異が生じていた。中島が初めて視察に訪れてから約1ヶ月後の2019年7月27日、第1回全体ミーティングとして初めて全員が顔合わせをすることになった。参

加したのは、芸術家メンバー10名とT氏、自治区長G氏、県営住宅連絡協議会会長W氏、そして日系2世のブラジル人であるD氏であった。

「憩いの場」に集合し、はじめにT氏からプロジェクトに対する思いが語られた。保見団地に関わるようになった経緯や、外国籍の子どもの成長を支えてきた経験について。また、中学校までは保見ヶ丘の公立に通うことができる外国人も、高校に入学しても学習についていけないことや、日本人らとの人間関係等の問題を理由に退学してしまう者が多いこと。さらに、ブラジルに帰ることができないまま日本で働くことになり、職場でもトラブルを起こして辞めてしまい悩んでいる教え子が存在すること等、言語も文化も違う国に子どもを対応させていくことの難しさについて語った。「子どもにとって自分たちが生まれた団地が大人になって誇れる故郷に」(2019/7/27 T氏の語り) するための一つの手段として、国籍を問わず集える場所として、「憩いの場」を明るい場所に変えたいという願いをもち続けてきたことを語った。

30年前に出稼ぎで日本に来たというD氏は日系2世としてブラジルで生まれ、ブラジルでは周りから「日本人」として見られながら生きてきたと話す。日本語もポルトガル語もどちらも堪能である。30年前に日本に来てからは逆に、「ブラジル人」として見られ、自身のアイデンティティについて悩んだ経験をもつ。自動車産業に従事し、退職してからは団地内の介護施設の職員として働きながら毎日団地内のゴミ収集所に立ち、外国人住民に対してゴミの分別について援助をしている。

D氏は、団地の保見団地に住むブラジル人について、多様な地域から来ていることもあり、ブラジル人のコミュニティも実は成り

立っていないと語り、「先日ボヤ騒ぎがありました。犯人はわかりません。ルールを守れない人やゴミの分別ができない人、落書きをする人、いろんな人がいます。外国人、日本人に限らず、ごく一部の人が守らないだけけど、『日本人対外国人』になってしまっているから、『また外国人が』という雰囲気になってしまっている。日本人の中にも、『どうせ外国人がやっているんだから、俺らも』と守らない人もいます。ただ子どもたちが集まっているだけで警察を呼ばれてしまう。1人が騒ぐと、だから外国人が・・・というふうに言われてしまう。」(2019/7/27 D氏の語り)という、日系ブラジル人として日本で暮らしているからこそ感じていることについての語りがあった。これは団地に住む外国人と日本人の共生を願うが故の葛藤の表れである。

中島を含めた芸術家メンバーは、この日初めて団地に住む人の生の声を聞いた。これまでの事前調査および視察は、インターネット等から保見団地について調べたり、現地の雰囲気を感じ、「憩いの場」の落書きを見て、壁面のサイズ感から制作図案をイメージしたりするためのものであった。D氏の語りの後、芸術家メンバーからD氏へ様々な質問が投げかけられ、D氏はひとつひとつの質問に真摯に答えてくれた。中島はこの日、Facebookに以下の記事を投稿している。

保見団地壁画プロジェクトがスタートした。コアメンバーが集結し、保見団地の生き字引と言われるD氏から話を聞いた。質問が多く飛び交い、それぞれがイメージを持ってこの場所に臨んだことがすごく伝わってくるミーティングだった。(中略) 始まったばかりだけど、すごい勢いで発展していきそうだと思えた

ことは、強い意識を持ってこの場に集まった芸術家達のおかげだ。(2021/7/27 中島 Facebook 投稿記事)

中島はこの日をプロジェクトのスタートと位置づけている。芸術家メンバーらはこの日、保見団地の住民の声を壁面に反映させたいという思いをもち、さらには、「団地の中に絵を描いているブラジル人とかいないかな。」「地元の小学校や保育園でもWSをやってみたい。」「チラシを作ってスーパーでビラ配りをしたらどうか。」(いずれも2019/7/27会議事録)のように、もっと多くの住民と交流し、取材を行いながら壁画制作プランを考えることを各芸術家に方向づける契機となった。

3-3. プロジェクト共同体としての芸術家

7月27日の第1回目の全体ミーティングの後から2020年3月末までの期間、中島や芸術家メンバー、トルシーダのT氏、自治区長G氏、県営事務所所長A氏、県営住宅連絡協議会会長W氏らを始め、保見団地に関わる人物ら20回以上の会議を重ねた。会議は日によってメンバーが入れ替わり、豊田市職員や愛知県多文化共生推進室職員、保見団地を拠点とする外国人向けの職業派遣業者職員、近隣の大学教員等、T氏は保見団地に関係する人物を毎回の会議に招待し、保見団地が抱える問題について共有するために多くの組織や団体を巻き込む画策を企てていた。

毎回の会議において最も重要な論点であったことは、「団地住民を参加させる仕組みを構築すること」であった。団地内で20年以上外国人の子どもを対象に日本語教室を運営しているT氏は、団地内でコミュニティーを創出し、顔が見える関係性を作ることで相談しやすい関係を形成することで、ゴミ問題

等の諸問題を改善して、治安の維持につなげていくことを長年の目標としてきたが、一方で自治区役員からは、「これまで何度も注意したり張り紙をしたり、頑張ってきたけど、外国人はなかなか協力してくれない。」「25棟（憩いの場）の壁に落書きが増えていました。」「この前〇〇棟で放火があったけど、それすら無関心だった。」「何かやるならチラシぐらいは配れるけど。」（いずれも2019/8/29会議議事録）という、外国人住民に対する諦めのような叫びがあった。

また、「そもそも、外国人は働くことが最優先だから、避難訓練とか草刈りとか、自治区がやっている集まりやイベントにはなかなか来ない。」（2019/8/29会議議事録）という言葉からは、出稼ぎにきた外国人の生活に対する意識と、地域の自治を担う日本人住民の意識には大きな差異が存在していることが浮かび上がる。自治区役員の苦労を理解する団地の管理者である県営事務所所長 A 氏は、「壁を綺麗にしてくれることは素晴らしい提案ですが、いつも頑張ってくださいている役員の方が準備に携わるのは大変です。成功させたい気持ちはありますけど、入居者の方が気持ちを出さないと成功とは言えないでしょう。」（2019/9/10会議議事録）と語る。自治区役員や団地の管理者は当事者として団地を少しでも住みやすい場所にするために、これまで多くの働きかけをしてきている。しかし、日本人がどれだけ呼びかけても外国人はなかなか動いてくれないこと、そして、それは仕方のないことであるということを切実に語る場面が幾度もあった。芸術家メンバーからは、「粗大ゴミの回収を手伝うのはどうか。」という意見や、「いや、かっこいい絵を描けばそれで十分だ。」（2019/8/30 グループ LINE 芸術家ディスカッション）という意見があり、どのようにしてプロジェクトに関わるべきか

を模索している状況であった。

「憩いの場」の落書きをアート作品に生まれ変わらせることを依頼された中島であったが、第1回全体ミーティングの前に T 氏から、「行政の都合上、4月に人事異動等があり難しくなるから年度内3月31日までに壁画ができあがってほしい。」（2019/7/6 T 氏から中島への E メール）と県営事務所からの連絡を伝え聞いていた。「憩いの場」の壁の面積を考慮すると、完成度の高い壁画作品を作り上げるには長い期間を要することは想像に易い。可能であるなら、壁画制作にかける時間を長くしたいという思いをもっていた。そのためにも、早急に住民と交流するための枠組みを作る必要性があった。しかし、第1回全体ミーティングにおいて、芸術家メンバーらは住民との交流の必要性について認識したものの、その交流の機会を設けること自体に難しさがあるということを知り、自治区役員や県営事務所所長から知らされたのである。さらに、「団地に住んでいるのは外国人だけじゃなくて日本人もいます。外国人を相手にすることで日本人住民からの反発があるかもしれない。」（2019/8/29会議議事録）という、多国籍の住民が存在する団地でプロジェクトを企画することの難しさが会議全体に浸透していった。T 氏は中島との会話の中で、自治区役員の意識を変える必要性について何度も話していた。「芸術家の皆さんは、住民の理解、共感を得ながらのプロジェクトの実施を提案されましたが、住民の当事者意識は見られず、このまま暗礁に乗り上げると思われたこともありました。」（フォトブック p. 4 T 氏の言葉）と振り返っている。

県営住宅連絡協議会の会長であり、他地区の外国人集住地域に住む W 氏は会議の後に中島に対して、「地域活動の難しさを目の当たりにしたと思いますが、これが現実です。

でも、住民から問題提起をしていかないと住みよい地域は作れません。」(2019/8/29 W氏から中島へのEメール)と、困難を克服するためにはやはり住民を巻き込むことが肝要であることを示すメッセージが届いた。いずれの立場の人物も団地を良くしたいという願いをもっているが、膠着した状況であった。

中島は、これまでの芸術家としての活動の中で地域イベントや各種学校等で子どもから大人までを対象としたWS企画、運営を幾度も経験してきたことから、アートを介して人と人が交流することで互いに共感し合う関係づくりが構築できる可能性を感じていた。膠着状態を打開するために中島は、住民を誘い込むことが困難であれば、地域のイベントにこちらから参加することについての提案をしたところ、毎年11月3日に、保見交流館で地域住民が主催する「ふれあい祭り⁶⁾」が開催されることを聞き、T氏や自治区長を介してふれあい祭りへの参加申し込みを依頼した。これを機にWSの企画が進展し、2019年11月3日にプロジェクトのキックオフイベントを開催することになった。それに伴いプロジェクトの名称を「保見アートプロジェクト」と決定した。それまでは、「保見壁画プロジェクト」(2021/7/27中島 Facebook 投稿記事)と呼称していたが、住民同士の交流の場を創出するための手段が「アートワークショップ」であり、住民と芸術家の協働の場が、「憩いの場の壁画制作」であるという認識に至った。

住民との協働についての議論の他に、毎回の会議の検討事項として必ず出てきたのは、プロジェクトの運営予算についてであった。

住民との交流を図るためにWSを行うことが効果的であるという中島の経験に基づき、WSに使用する材料や画材、さらには全世界帯に配布するチラシや集会場等に掲示するポスター等作成にかかる経費について説明をした。年度途中であることから予算申請をすることができないため、愛知県からは「憩いの場」の壁の落書きを白く消す修繕工事費のみしか予算が確保されていないことが中島に伝えられていたが、プロジェクトを推進していくためには、予算をどこから捻出しなければならない。会議では、近隣の企業から協賛してもらうことや、愛知県や豊田市の助成金を申請して経費を集める必要性についての議論も継続していた。9月10日の会議において、中島はT氏や自治区役員、県営事務所、豊田市職員らに対して以下のように考えを述べた。

一番大切なのは、住民の皆さんを巻き込むことで、3月にイベントだけでもあまり意味がない。11月から毎月2、3本のワークショップをしながら住民に対して、自分たちが「憩いの場」の壁に絵を描くことを伝えていきます。多くの住民から賛同を得たい。今、芸術家メンバーの中でそれぞれがWSを計画しています。11月3日のふれあいまつりや小学校でのワークショップも企画していますが、予算の面で、我々はボランティアではやってはいけないと考えています。保見団地を良くすると言っても僕らは外部の人間なので、アートの方で団地への愛着、住みやすさ、明るさを感じてもらえるようにするためには、県、市、団地の住民の皆様のご支援が必要です。道具類はメンバーで持ち出しできるものは購入しない方向で進めます。(2019/9/10会議

6) 保見交流館で毎年11月3日にちに開催されている地域住民らによる飲食ブースや物販ブースの出店や、地域の子ども達による音楽演奏等が行われるイベントである。

議事録)

プロジェクトを推進するにあたり、芸術家は「ボランティアでやってはいけないと考えている。」と語っている。これは中島のこれまでの芸術家としての種々の葛藤に要因がある。「地域貢献」、「町おこし」の名目で依頼を受け美術制作やWSに取り組んできた中島であるが、多くは材料費のみでの活動である場合が多かった。中島は、「人件費」という名目ではなく、「美術作品の価値」に対する報酬についての芸術家と一般の人々の差異についての葛藤を抱えてきたことから、会議の中で語ったように、「ボランティアではできない」としつつも、人件費≒美術作品の価値を報酬として求めることに対する難しさを表出させている。

以後も芸術家メンバーやT氏をはじめ、自治区役員や県営事務所職員、市職員他、様々な立場から議論を重ね、必要経費に関しては会議に参加した市職員らの協力を得て、豊田市の事業である、地域課題の解決や地域の活性化に取り組む団体を支援する地域活動支援制度である助成金事業への申請を行うことが決まり、10月4日に豊田市に助成金申請の書類を提出することになった。申請団体の構成員は、トルシーダのT氏を代表に据え、副代表に県営住宅連絡協議会会長W氏、自治区長、副区長2名、芸術家リーダー中島、日系ブラジル人2世住民D氏の他6名の会議参加者で構成することとなった。また協力団体として、これまでの会議に参加した各組織、企業等からも賛同を得ることができた。会議を重ねたことで、プロジェクトの共同体が形成されていったのである。

3-4. クラウドファンディングの影響

助成金の申請にあたり、T氏は市役所にお

いて審査や面接をとおして、助成金獲得に向けて保見団地の現状や多文化共生への願いについて伝え、アートプロジェクトを開催する意義について説明を繰り返した。しかし、「担当者のせいなのか、地域会議のせいなのか、この申請をとおして支所が何の課題意識ももっていないこと、保見団地を向いていないことを実感しました。」(2019/10/20 T氏から中島へのEメール)とのメールの後の2019年10月25日、助成金不交付の旨の通知がT氏の元に届いた。「多文化共生のモデル団地になるような事業になることを期待」(2019/10/25会議議事録)する審査員や、「保見団地だけの問題ではなく、豊田市の問題でもある。社会全体の問題である」(2019/10/25会議議事録)ことを認識している審査員もいたというが、結果は不交付であった。

9月の会議以降、中島ら芸術家メンバーは、保見アートプロジェクトとして2019年11月3日に保見交流館で開催される「ふれあい祭り」で行うWS内容を計画していた。その直前に助成金が出ないことが決定したことを知らされた中島は、当面の活動費をそれぞれの持ち出しで賄う覚悟が必要だということを芸術家メンバーに伝えた。どういう形となっても本プロジェクトを遂行したいという思いと、予算に対する不安の中で芸術家メンバーは葛藤しながらも、「憩いの場」への視察から、住民の声を聞き、会議を重ねたことで、芸術家メンバーの中には、地域課題にアートがどのように役立つのかということを考え、自分の力を試したいという思いが芽生えていた。

芸術家にとってWSを行う目的は、住民と交流すること。「憩いの場」の落書きをアート作品に生まれ変わらせるという計画を住民に周知すること。今後継続して行うWSへの参加を依頼すること。以上の3点であった。会議の中で参加費を徴収することでプロジェ

クトを運営していくという提案があったが、上述の目的に基づいた協議の結果、WSの参加費は全て無料とすることを決めていた。有料にすることで、外国人住民の参加が望めないことを懸念する声が多かったことも理由に挙げられるが、何より、多くの住民と関わることを重要視するために選択した方法である。

助成金不交付が決定した日にT氏から、「クラウドファンディングをやってみましょう。助成金というのは市の税金であることで様々な制約があるけど、クラウドファンディングはそういった枠がないから自由にやれると思う。」(2019/10/25会議議事録)という提案があったことでプロジェクトは大きく動き出すことになる。中島はこの時、「芸術家がクラファンやったらダメじゃない？芸術家は作品を作って売ってその対価としてお金をもらうものであって、作品を作る前からお金を集めるのは、違う気がする。」(2019/10/25中島から芸術家メンバーへの個別LINE)と、相談していた。クラウドファンディングを運営している企業のウェブサイトを見たり、個展開催のための資金の支援を募る芸術家や、海外に行ってパフォーマンスをするための渡航費の支援を募る芸術家等、多くの芸術家がクラウドファンディングを活用している。上述のLINEメッセージからもわかるように、中島はこのことに対して否定的な考えをもっていたこともあり、T氏からの提案にすぐに頷くことができなかった。さらには、プロジェクト共同体メンバーの誰一人としてクラウドファンディングの経験がなかったことで、助成金と同様に失敗する可能性を考えていた。

2019年11月3日の保見アートプロジェクトキックオフイベントとして位置づけた保見交流館における「ふれあい祭り」での多くの

住民とのWSをとおした交流から、終了後に中島はFacebookに以下の記事を投稿していた。

長い会議室での議論から抜け出し、やっとプロジェクトは第一歩を踏み出しました。日本人もブラジル人も、多くの保見の人たちと交流することができました。どこの地域も同じかと思いますが、子どもは素直で明るい子ばかりだったという印象でした。反省会でこのことを話すと、中学2年生ぐらいになり高校受験を考える頃になると学校から疎外感を感じるようになったり、アイデンティティについて悩んだりするようになり、非行に走る子どもが増えてくると聞きました。(中略)M中学校に勤務するブラジル人の先生とお話をしましたが、ブラジル人の子どもにアートに触れて感性を豊かにしてほしいと言っていました。エネルギーを発散させてあげたい、とも。このプロジェクトの意義は、保見に住む子どもが大人になっても、保見や日本に愛情を持って生活し続けるための「場所づくり」をアートによって創造することだと、改めて感じました。(2019/11/3 Facebook 中島投稿記事)

クラウドファンディングを行うことについて否定的だった中島であったが、第1回目のWSをとおして、また、芸術家メンバーらとディスカッションする中で、「クラファンをすることで支援金を集めるためにみんなで告知をすることをとおして、保見団地について多くの人に興味をもってもらうきっかけになるかもしれない。」(2019/11/4グループLINE 中島投稿記事)という心境に変化していた。

キックオフイベントで実施したWSは、

1800 mm × 1800 mm のキャンバスに参加者が自由に好きな絵を描くことができる「お絵かきWS」と、アクリル板をニードルで削って模様を表現するスクラッチカード作り、さらには缶バッジ作りの3種類であった。子どもから大人まで50名以上の外国人住民と交流することができた。WSに参加した子どもたちが、落書きやゴミが不法投棄された「憩いの場」で遊ぶ姿を想像することはできない。「あの子たちと一緒に憩いの場の壁に絵を描きたい。」(2019/11/3 グループLINE メンバーM 投稿記事)、「ブラジル人のおじさんたちが陽気で面白い人ばかりだった。会議で自治区の人達が外国人のことを否定的に話していたけど、マイナスな面が全然想像できなかった。」(2019/11/3 グループLINE メンバーA 投稿記事)、「保見団地をいろんな人に知ってもらいたい。」(2019/11/3 グループLINE メンバーR 投稿記事)というように、芸術家メンバーらは、WS終了後のグループLINEやSNS等で感想を伝え合った。

また、第6回目に行ったブラジル人学校でのWSでは、中島が講師となり小学部の30名の児童を対象に書道体験を行った。ブラジル人学校では主としてブラジルの教科書を用いて、帰国してからもすぐに適応できるようブラジルについて学んでいるため、日本語を全く知らない児童がほとんどである。その中で中島は、墨汁と書道用筆、書道用半紙を使った書道体験を計画した。通訳を介し、児童らにポルトガル語で好きな言葉を書いて良いことを伝えたが、参加した全員が日本語を書こうとして中島に日本語の書き方を尋ねてきた。中島を含めWSに参加した芸術家メンバー3名はスマートフォンの翻訳アプリを使用し、児童から聞いたポルトガル語を日本語に翻訳してからお手本を書き、児童らはそれを真似て書いていた。WS終了後中島は、「彼

らなりに、一生懸命日本に適応しようと努力している姿を見た。彼らの努力を見て、受け入れる側である日本人の意識を変えていかなければならないと感じた。」(フォトブック p. 25 中島の言葉)と記している。

これまで中島は、会議をとおして自治区役員や行政から外国人住民への不満や交流の難しさ等について聞いてきた。WSにより外国人住民の生の声に触れるたびに、言語や生活習慣の違い等があっても多文化共生は可能であることを感じるようになっていた。例えば、WSでの外国人らとの会話は日本の漫画文化への興味やポップカルチャーの話題が多いことから、文化のひとつである日本のアートをプロの芸術家からのレクチャーによって体験させたことで、日本への興味や関心を加速させる効果があったといえる。

第1回目のWS終了後、11月10日から保見アートプロジェクトは県営保見集会場をWS会場の拠点にして、公立小学校やブラジル人学校も含め継続的にWSを開催した。同時に、芸術家メンバーらや協力者および協力団体等、プロジェクト共同体が一体となってクラウドファンディングの支援依頼の広報を行った。そして、全10回のWSの、2020年2月2日に開催した第8回目のWSが終了した数日後の2020年2月7日に、106名の支援者から、目標金額である150万円を上回る支援金を募ることができた。

中島は、保見団地の住民だけでなく、周縁や外部の人々に現状を周知し、保見団地が抱える問題は保見団地だけの問題ではないということを伝えていく必要性を感じたことで、クラウドファンディングに挑戦することを決めた。結果として、活動資金を集めるために広報活動を展開することをとおして、保見団地の現状や問題意識を広く外部の人々に伝え、共有することができた。これらの活動は

全て、芸術家としての壁画制作コンセプト生成に関与するものであった。

また、支援金は、これまでの中島にとって報酬についての葛藤であった、人件費という概念でも美術作品の価値としての対価という概念でもなく、保見団地の課題解決のための共同体や支援者からの使命として託された資金であり、これを中島は「使命感」という言葉で表している。中島はクラウドファンディングを経験したことについて以下のように記している。

プロジェクトに取り組むにあたり影響が大きかったことに、クラウドファンディングを経験したということが挙げられます。本当に多くの方からのご支援、ご協力をいただきました。皆様に背中を押していただいたおかげで、最後まで使命感をもち、何より楽しみながら制作することができました。(フォトブック p.92 中島の言葉)

WSの参加者について、最初から数回のWSはスタッフ以外、全員が外国人住民であったのが、少しずつ日本人住民も参加するようになっていた。芸術家メンバーは、外国人住民と交流することを主目的としながら、外国人住民と日本人住民のパイプ役として、アートをとおして国籍を問わず様々な住民と交流するようになっていた。UR住宅に住む日本人の中には、長年保見ヶ丘に住んでいても県営団地には来たことがなかったという住民が存在する。そういう日本人住民が、保見アートプロジェクトやクラウドファンディングのことを知り、WSに参加して積極的に外国人と関わろうとする姿が現れるようになっていった。

また、団地内の公立小学校においてWSを

行ったことで、日本人住民の児童も参加するようになっていった。「入居者の方が気持ちを出さないと成功とは言えないでしょう。」

(2019/9/10会議事録)と語った県営事務所や、外国人住民の地域活動への参加を諦めかけていた自治区役員らは、WSに参加する多くの住民の姿を目の当たりにしたことで、プロジェクト運営に対して協力的になり、自らもアートを体験し、積極的に住民と交流する姿があった。中島は、子どもから大人までの国籍を越えた交流がアートを介して展開している様子から、多文化共生問題を解決する手段としてのアートの可能性について確信をもったのである。

4. おわりに

本稿では、芸術家が外国人集住地域である保見団地においてアートプロジェクトを企画、運営することで生じた、地域住民や行政との意識の差異や、芸術家としての葛藤、プロジェクト運営を通して協調関係を築くことになった共同体についてオートエスノグラフィによって浮かび上がらせた。芸術家の本分は芸術作品を制作することであるといえるが、本プロジェクトにおいて、壁画制作にかけた期間はわずか2週間であり、それ以外の約9ヶ月間は会議と、住民との交流、資金調達のためのクラウドファンディングの広報活動の繰り返しであった。本プロジェクトをとおした様々な人々や事象との摩擦や、壁画制作に取り組むうえでの資金面等における芸術家としての葛藤、そしてクラウドファンディングによって得た、葛藤を越えた「使命感」から、芸術家は多様性と向き合う「対話力」を身につける基盤ができたといえる。アートを介した交流が多文化をつなぐ可能性についての示唆を得ることができたことも、芸術

家が主体となってアートプロジェクトを企画、運営したことにおける一つの成果であろう。刻々と変化していく社会的情勢や社会的事象の中で、現代を生きる芸術家に求められるものは、社会的情勢や社会的事象との主体的な対話であり、多様性に立ち向かうことができる流動的な対応力ではないだろうか。

参考文献

- ・井本由紀「オートエスノグラフィー」藤田結子・北村文編 (2013)『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践—』新曜社 pp.104-111
- ・小川さやか (2019)「SNS で紡がれる集合的なオートエスノグラフィー—香港のタンザニア人を事例として—」文化人類学84(2) pp.172-190
- ・キャロリン・エリス, アーサー・ボクナー, 藤原顕著 (2006)『自己エスノグラフィー—個人的語り・再帰性: 研究対象としての研究者』質的研究ハンドブック(3) pp.129-64 北大路書房
- ・児島明 (2006)『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー—』勁草書房
- ・築山欣央 (2017)「共生社会の視点—豊田市保見ヶ丘のNPOを手掛かりとして—」法政論叢53(2) pp.139-164
- ・中島法晃 (2016)「芸術家のオートエスノグラフィー—副業と制作概念の関係—」名古屋大学教育発達科学研究科紀要第63(1) pp.71-81
- ・中島法晃 (2020)「芸術家のオートエスノグラフィー—地域における芸術家の実存—」岐阜女子大学カリキュラム開発研究2020 5(1) pp.1-10
- ・Faith Wambura Ngunjiri, Kathy-Ann C. Hernandez, Heewon Chang (2010)「Living Autoethnography: Connecting Life and Research」Journal of Research Practice 6(1) pp.1-17
- ・福島智 (2011)『盲ろう者として生きて～指文字によるコミュニケーションの復活と再生』明石書店
- ・保見アートプロジェクト編 (2020)『保見アートプロジェクトフォトブック』しましまプリント
- ・Jane Edwards (2021)「Ethical Autoethnography: Is It Possible?」International Journal of Qualitative Methods 20 pp.1-6
- ・Sarah Stahike Wall (2016)「Toward a Moderate Autoethnography」International Journal of Qualitative Methods January-December 2016 pp.1-9
- ・Tony E Adams, Carolyn Ellis, Stacy Holman Jones (2017)「Autoethnography」The International Encyclopedia of Communication Research Methods. 2017 pp.1-11

ウェブサイト

- ・特定非営利活動法人トルシーダウェブサイト <https://torcida.jimdofree.com/> (最終閲覧日 2021/3/21)
- ・保見アートプロジェクト Homi projeto de arte Facebook ページ <https://www.facebook.com/homipda> (最終閲覧日 2021/3/21)
- ・Ready for 株式会社「壁を使って、壁をなくす。アートで保見団地に国籍を超えた交流を」 <https://readyfor.jp/projects/29824> (最終閲覧日 2021/3/21)

謝辞

本稿執筆にあたり、トルシーダの皆様や自治区役員の皆様、県営住宅連絡協議会会長 W 氏、行政職の皆様、そして保見団地の住民の皆様、保見アートプロジェクト共同体を形成した全ての皆様に感謝申し上げます。